やまなし
医療最前線
コロナとの闘い
県立中央病院から
〈257〉

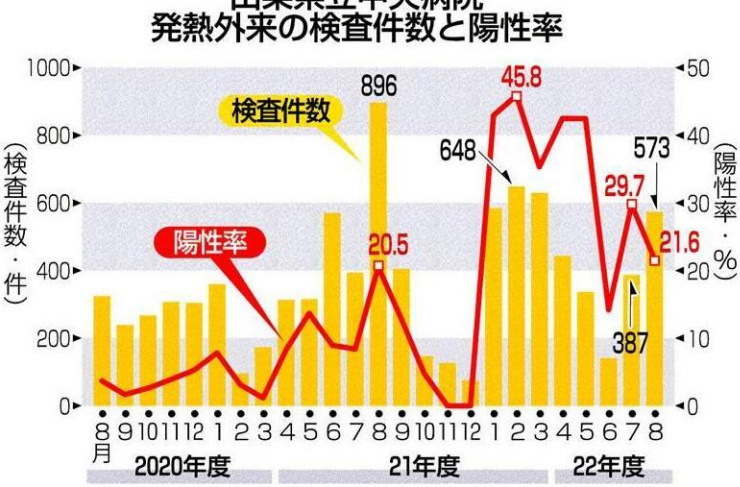
軽症者の救急搬送 医療を圧迫
人材流動性高め機能保つ

森沢恵美子
主任看護師長

新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」の強い感染力によって全国と同様に山梨県内も陽性者が増えた。第7波がやってくると、発熱症状がある軽症者の救急搬送が相次ぎ医療を圧迫するという新たな課題にも直面。県立中央病院は厳しい状況に陥りながらも患者の受け入れを継続した。

県内唯一の3次救急医療機関である同院。高度救命救急センターは事故や急な病気などで搬送されてくる重篤な患者と向き合う「命」の最前線だ。新型コロナ感染拡大以降は発熱した患者に対してPCR検査や診察を行う発熱外来も担当する。

「オミクロン株の流行前後で大きく異なるのは陽性率」。高度救命救急センターの森沢恵美子主任看護師長はそう説明する。同院が設けた発熱外来の集計データをみると、オミクロン株流行前は、大規模なクラスターに同院が中心となって対応した昨年8月でも20・5%。対して今年1月以降は大幅に伸び、2月には最大となる45・8%に達した。



第7波では院内に感染を持ち込まないため職員に対して積極的に検査を実施した結果、陽性率自体は一時期に比べて減少した。検査で陽性を確認する患者も減ったが、代わりにホームケアや宿泊療養中の陽性患者の受診が増えたという。空気循環設備を設置した診察・治療スペースが足りなくなり増設して対応した。

さらに軽症者が救急車を呼ぶ事例が多発。本来は重篤な患者を中心に受け入れる同院も大きな影響を受け、発熱患者と病気や事故による患者がほぼ同時に搬送されてくるケースが目立つようになった。

通常診療を継続している中で救急搬送患者が増加したために一般病棟の病床使用率も上昇。医療スタッフに感染・濃厚接触者が出て人員の確保に頭を悩ませることも一度や二度ではなかった。

「コロナと向き合いながら通常の医療を維持できるのか。これまで経験をしたことがないほどの危機感を持った時期もある」。森沢さんはそう振り返る。

病院の機能維持の要因には病院全体の協力もあり、看護師の流動性を高めて人手不足を補った。

「医療スタッフに感染・濃厚接触者が出た際には、急なシフト変更にもかかわらず別のスタッフたちが応じてくれた」と森沢さん。

「現場のサポート、踏ん張りがなければどうなっていたのかと思う。本当に感謝している」

＝「コロナとの闘い」シリーズは休載します。次回は27日に掲載します。

掲載日：2022年10月13日／ぶんくら／紙面頁012
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社